

映画の小箱

実在の天才的ピアニストの
生涯に題材を採り、
音楽と共にある人生の輝きを描く

『シャイン』 魂を揺さぶる 生の輝き

金丸弘美=文
text by Hiromi Kanamaru
デボラ・レイベン=写真
photographs by Deborah Raven

「音楽は自然にハートから流れたすものよ」とは、作家のキャサリンの言葉だ。彼女はこの物語の主人公のピアニスト、デヴィッド・ヘルフゴット（ジェフリー・ラッシュ）の才能を認めた人である。

感動的な音楽とは、まさにハートそのものだ。主人公が生きるすべてを音楽の中に見だし、好きなことほど人を生き生きとさせ、希望をもたらず、そう感じさせ、納得させたのは、この映画。そして、映画の旋律の素晴らしさも美しい音楽と同じように、ハートから流れたすのではないか、そう思わせたのも、この映画だ。

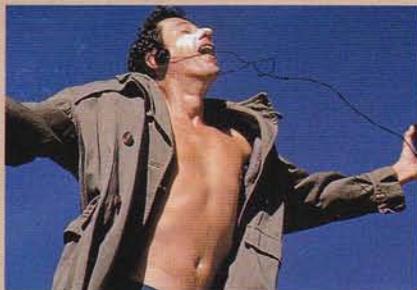
オーストラリアを舞台にしたこの作品は、主人公の幼少時代の小さな家と庭、そして、町の風景のバステル調の色合いが美しい。その美しさのなかで、父親ピーターの異常とも思える、自分の息子デヴィッドへの愛と子供に託した音楽への思い。それが丁寧に描かれれば描かれるほど、風景と親子の葛藤が、き

わだつてみえる。

父親の思いを託された子供デヴィッドの音楽へののめりこみと音楽による破滅、そしてやがてやってくる音楽による再生と復活と生きる希望。ここに登場する音楽とドラマと映像との旋律は見事に織りなされ、調和して、感動させずにはおかないのだ。

話は、夜の雨の中を一人の男が、一軒のワイン・バーのガラス張りの入り口を叩くところから始まる。その男とは、主人公デヴィッド。幼少の頃、ピアノの天才といわれ、ロンドンに留学後、しばらく世間から忘れられていた男なのである。バーの女性従業員との話しか、やがてデヴィッドのそれまでのことが、次第に明らかになっていく。

デヴィッドは、父親に小さい頃から音楽を聴かされ、ピアノを教わった。父親は自分が小さい頃に、音楽が好きだったのに、断念せざるえなかった。それだけに、息子に託す音楽への執着は異常なほどだ。



幼少のデヴィッドは父親とともにコンクールに出場し、ショパンのポロネーズを弾く。審査員はデヴィッドの才能にひかれて、父親を訪ね、教授を申し入れる。だが、父親は拒否した。父親にとつて子供の弾く音楽は、自分の思いのこもったラフマニノフのピアノ協奏曲3番でなければならぬのだ。しかし、その曲は、段階を経てレッスンし、相当な熟達後でないと難しい曲である。

だが、父親は考え直し子供を審査員にあずけた。金のない父親は、息子の才能と引き換えにレッスンを無料で頼む。やがてデヴィッドは頭角を表し、コンクールで優勝。アイザック・スターンにアメリカ留学を薦められる。せっかくのチャンスだが、子供への執着が強い父親は子供を殴り「家族の絆を壊す」という理由でアメリカ行きを蹴ってしまうのだ。絶望的になったデヴィッドを慰め勇気を与えたのは、音楽会を通じて知り合った初老の作家のキャサリン。彼女に励まされ、デヴィッドは、ロンドンからの王立音楽学校への奨学金を受け、父親の反対を押し切って留学する。そして彼が寝食を忘れて取り組んだのは、父親が固執したラフマニノフのピアノ協奏曲第3番。とうとうコンクールで発表する。絶賛の嵐。だが、彼は会場で倒れた。

以来、故郷に帰り、精神病院で音楽を取り上げられ十年の間、世間から遠ざかる。その彼を外に出したのは、病院に慰問に来た修道院の音楽好きの女性。デヴィッドのピアノを、かつて聞いたことがあったのだ。こうして彼女の助けで、修道院を経て、一人暮らしが始まった。そして、ある日とりつかれたように、雨の中を外に出て、ワイン・バーを訪れたのだ。バーにはピアノがあった。そこでデヴィッドは座るなり、ピアノを弾いた。たちまち観客を魅了してしまう。

このときのリムスキー・コルサコフの「くまんばちは飛ぶ」の曲の躍動感と、デヴィッドが十年を経て客の前でピアノを弾く歓喜のなんという素晴らしき。

やがてデヴィッドのことは世間に知られ、父親と再会。そしてコンサートへの復帰。そして運命的な女性への出会いから結婚へと展開していく。

それにしても純真無垢に、音楽の世界へと走って、その中に生を見いだしたデヴィッドの生きざまは、まるで、神が奏でた音楽のよう。デヴィッドは実在の人物。「人生を投げないで生きていく。運命だ」と言う、彼の言葉が印象的だ。

『シャイン』

(豪/KUZUIエンタープライズ) Shine 1995年

監督=スコット・ヒックス

出演=ジェフリー・ラッシュ、ノア・ティラー、ソニア・トッド

アーミン・ミュラー=スタール、リン・レッドグレイブ

3月上旬より、東京・有楽町スバル座ほかにて上映予定